疱瘡豫防雨夜談

全

十武9
688

武ヤ9
門
688
巻

兩夜談自序

疱瘡乃名古にゑし醫學入門り周の末秦乃はじめ
ゆゑ也といへと穩ゑ肘後方ゑ東漢乃建武年
中ゑ南陽ゑて虜を擊しと紀其毒にをそ中國ゑ
流布ゑ故ゑ虜瘡也といふ外臺秘要ゑを唐ゑ
高宗乃永徽四年西域ゑり中國へ移ゑ来ふといへと

日本学士院
購入
昭和十三年

此瘡變化すること聖瘡ともいふ又一生に一度
は百歳にもなるもあり百歳瘡とも云又天行疫
病なるゆへに天瘡或は天花瘡ともいふ又其瘡の形豌
豆に似たるゆへ豌豆瘡又は登豆瘡ともいふ其外に書
にしるすところ痘瘡とは云ふ病源候論
に時氣頗瘡疫癘皰瘡とあり聖濟總錄にも皰瘡

とあるは皰瘡とはいはず外臺秘要に初て豌豆皰瘡
とし出たり我朝にては人皇四十五代聖武天皇天平八丙子年
筑紫の人新羅國に漂流しけるに此病にかゝり来り
て日本に流布ひろまる貝原氏の和事始にも聖武天
皇の御時甚佛法を尊信しまつりゆへに其功徳なく
天皇乃御末にもなほ絶ずしてなほ剩あやまるかを

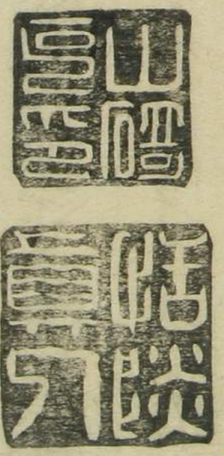
神國乃人ハ傳へ〻萬世諸人の憂とする侍ふ事なり
事なるや朝鮮の南秋江ハ著し給ふ鬼神論ハ瘡疹の
病を鬼神の致す所とありしかち神道者乃説ハ神
國ハ疫病なる病なるを聖武天皇乃御時新羅國より
おこり来て日本ハ流布を住吉大神ハ三韓降伏の神なる
ゆへ此病ハうよと住吉大神を祭りいのるゆへ痘神也と

云と理有に似たれ共誣なる説なりと見原氏を記されわ
ちゝし預防乃術と有毒おこりやすう伯母知多郡へ嫁して
其家醫にして農なるゆへ菉豆をうへくある人の菉豆を
痘毒を解とよつを聞及ぶ年〻菉豆をうへおきし故
ゆへ八十餘歳ハく身ハ一生疱瘡をやまず伯母
常に其事をゝに告て存生乃中年〻菉豆を贈て越さ

まて予にかたらせるまてしう予三十歳ヌ及ふ比ゆて手蒙
蒙豆をかくし小や今年六十九歳ふたれといとゝ疱瘡を
やすく此さろ西乃夜或人来りて疱瘡流行ふたり預防
稀痘の方を尋求らるゆゑ手近抱書に出そるを語
り侍きハ願くを梓に上ゆくゝ保赤の一助ふらへしとある
にてやせとり敢す小冊ゝ雨夜談ゝ蹄ゆゝ云爾

享和三年亥二月

恬淡真人識



雨夜談

神功消毒保嬰丹

毎年三月朔日一丸ヅヽ服すれハ痘毒を消し右乃ないくさ二年後ちまで毒尽て一生疱瘡を免す

纏豆藤 十文 生地黄 牛房子 山査肉 各十文 當歸 酒ひて 黄連 酒をそゝきいる 桔梗 防風 荊

芹　赤芍藥　甘草　香附子　升麻　七文
獨活　二文　赤小豆　七十粒　黑大豆　三十粒　絲瓜　二ツ長さ八寸はゝ
うけゝるゝの
黑焼さふし
右十七味細ふ粉ふして砂糖ようにまぜ李核の大さふ
丸し辰砂ふ花して文ふ衣ふし一丸ゝ甘中乃黄
湯ふく用ゆ

梅英稀痘丹
梅花蘂　七ツ　辰砂　細ふまりふ花す　一文
右二味ふ乃末ふ砂糖ふ交へ服す　疱瘡かなゝ粒
し毎年用ゆまふ痘疹をやまず一方に十二月梅花を
ゝりかげゝし粉ふして蜜ふて祢と豆乃大さに丸
酒ふて常に用ゆまハ疱瘡をやまずともあり

四脱丹

蟬脱　蛇退　鳳皇臺　小ハりのすゝ　乃かゝち　神仙脱　ふさおや　の爪

右原料ゝあつ粉ゝ　蜜ふく　菉豆乃大さ小丸

し　多年　ろうげん　製　之　抜すれハ　疱瘡をやらす

玄兎丹

玄参　五匁　兎絲子　十匁

右二味挽をいと粉ゝて　葛粉ふ　練　むくろし　粥

大さ九ゝ　毎日三丸さゝう　湯ふくゝちゆ

代天宣化丸

人中黄　甲己乃年ハ二匁ロト　黄芩　乙庚の年ハ二匁ロト　黄栢

丙辛ハ年ハ二匁ロト　梔子　丁壬の年ハ二匁ロト　黄連　戊癸ハ年ハ

其外の年ハ一匁二ト　仁　二匁ロト

一匁二ト　山豆根　牛房子　いる　連翹　酒ふて　荊

芥穂　苦参　紫蘇　防風　各九匁

右十二味を粉にして日に三回ふり粉にして升麻をせんじ竹瀝を
ぬりにゆぜ神曲を粉にして乳粥にまぜ乃粉薬成
行り丸し夜明始更ふりくすり粉にして右ふり
疱瘡はやるとき三丸竹乃葉を煎じ用ゆるなり
かりそめにもあらふべしとてもしるしてかるし

人中黄古らへやう大なるふ甘草皮をけりきり黄乃
ふを一方ぬし切りきるの中へ甘草をいれ竹乃
口をさぶりふさぎ水乃いらざるにて大便せん
うらへいきひしてす事四十九日とり出しあらひ中
の甘草をとり出し日ふさとかしあらふ粉にする

稀痘萬金丹

羌活　樺皮　茜根　栝蔞根　牛房子いる　天麻
連翹　名十女　麻黄根　升麻　名十女　當歸　芍
藥　川芎　名十女

右十二味水二升ふて煎じ半分なりて布ふくしぼ
かすとこりをよくせんじはめ絞りおくに蜜を
すこし加へて別ふ麝香名ト雄黄沈脳名ト麝香

七ト全蝎十四箇あぶり蝦蟇の黒焼一文ト右六味細
ふ粉ふして面へ乃茶汁ふて練りむくろじ乃大さふ
丸し茶乃うれあ器ふいれ毎年春ふ秋分ハ日一
丸ツゝ温ふ兎乃血をかしはぜあてめて腹すれハ痘
あをとげしてちりをやぶ又疱瘡はやるみふを
用てよし痘毒大便より下ルそやぶをとゝ屋そて

怪し

兎紅丸

辰砂　甘草　六安茶

右三味粉末にして十二月八日午の時に兎の生血
をとり練り合て桐の大さに丸し毎月三六九の
日一丸づゝ腹まれハ湯にてをのむべし

兎血丸

十二月八日兎の生血をとり搗麦の粉をまぜ
あゝ色蒙豆の大さに丸し、かゞ湯にて小豆の小児ハ
二三丸乳けみくちにて必ず過多に紅點を吹出候其
ちゝ小児を抱すれハ一生湯にてそうをやまず候今
五十ともに成て怪し朱長するにもちゆる小兎肉

を合すべし

龍鳳膏

頸ふりおすべる蛭蚓生るを一つ捕へ烏鶏の卵一つ
ちさ紀宛をあまき蛭切と卵の黄へいま厚あ厚ふ
糊してはのつかをふさぎ仮乃ふとよ亟むて
そをかまいけるさまるふ紀とう乃殻をさら蛭蚓とすて

一卵の肉を小黄ふ合せ一心あ年立春乃日一つ〻食す
きは一生疱瘡をやのすあ疱瘡はある吋ふ食べ
てよし

扁鵲三豆飲

菉豆　赤小豆　黒大豆　各一升　甘草　二文
右四味あハ作ふく煮て豆の熟て汁を取ふ

まゝ世食ゝけたのむ小児七日ゝちゆれハ疱瘡を用ぬれ
そゝ人煩ふても都一方に黄大豆白大豆を五斗かへ
て五豆飲とらす

鄭魚方

鄭魚大小ともに鱗腸をさらり水をよくあらひ芫
荽細くきらり塩少しまぜふりかけ板へいれ石をおき紙

小ぢゝ灰火の中小いまむし蒸かをさらり小四ゝ
食をゝ世常小食すれハ疱瘡をやゝずゝ鄭魚の
鱗腸骨ふくれ中に切むへし

鼠肉方

大ハ小ふ雄鼠皮毛腸穢をさらりよくあらひ酢り塩
少しいまを煮煠ゝ小四小食ますへし但小児小人を用

うすき魚うろこ一方に砂仁小塩かし加へ煮ふくめあり

蝦蟇方

八月大なる蝦蟇をとりこの皮腸をさりきよく洗へ

胡麻乃油小さかめ十後湯かくいりて事貴を去

小豆に合せむ丸十四匹を合すれば疳瘡をやぶる

稀痘方

牛黄一文　蟾蜍三ト　辰砂七ト　絲瓜蔕蔕よ迫ふ

くろやきにてよく

右四味細末にして南蛮九ツを肩をかりぎわりをとりぬる

又方

辰砂一文　麝香少　莨菪子三十六粒かしを減ふつみ

右三味すり合せ粉のごとくにして新しき紀筆にて小児の
頂顖手足ちうでくび足うら腿のうらに碁石
の大さ程ぬり乾さ蔵ふるゝ日を必あらいさらぬ
ゝて但端午の午の時塗へし一年ぬれハ疱瘡
出ずゝ数十粒なり二年ぬるとハ疱瘡一二粒三年
塗るハかるゝ事やすゝ伝ふ家十六代疱瘡

をやすぶるゝ
疱瘡やすさふ法
生玳瑁　犀角
右二味同ゝ様にして小児ふるゝ
又方
小児生まれ稚乃蒲蔵ゝ五十辰砂

二トヽ五匁いつまも細ふ粉にしてく別ふ生地黄當帰ずう
ふくちくせんじ飲汁ふこるゆ乃粉末を夜ちふ
吹うるゝ大便に汚穢乃あを下し一せ疳癪をやぶ

又方

小児初くせれ生地黄乃自然汁を蜆貝に二
三盃ぜ飲ちんハあるゝ下してやうそうと

やまぶ

又方

白鴿羽毛腸をさるそ乃表て煮て小児ふ食ち
しむ胴毛ハふくせんし趣味をあふ屋し

又方

鶴乃卵ふくせて小児に食ちむ

又方

白水牛の蝨あぶりをりひ粉まぜて傷乃ぶくにぬて

食をし心

又方

葵根をふて煮て小児よ食をし心、

又方

兎乃皮をふ表をふてせんど小児を洗すれバ

そうを愈ル

又方

絲瓜蔓ちうづん乃表水をふくせんど小児を洗す

まは疱瘡を愈す

滌穢免痘湯

五六月乃比へちまの花をとりてかげぼしにし二両
扨正月元日の子乃刻に両親(ふたおや)共(とも)一人外乃人ありとも
せんじゆにてせんじ小児の惣身(そうみ)をあらへバ一生わづらハ
ず疱瘡せずもし疱瘡てもかるきなし

胡蘆花湯(ころくわとう)

八月頃葫蘆花をとりかげぼしにし黄瓜乃葉水にて
せんじ小児に浴すかならずびやうきをのがるゝ

又方

六月上の伏日(ふくにち)胡蘆(ころ)の嫩蔓(わかづる)数十根(すじつこん)とりてかげぼし
にし正月元日の五更(ごかう)に人よ志らざるやうにあふて

烏魚湯(うぎよとう)

せんじ小児を浴す

七星大烏魚　一名黒魚一名烏鯉魚一名鱧魚一名蟲魚　一尾ふるゝば二三尾

十二月晦日の雪食よりふてせんじふしぬを泔す熱身

ふるゝくさゝあるゝへしなぬぐさゝを煎じてそのあとを

湯水ふてあらゝべゝす或ハ伝ぎぐ一手又ハ一足を煎

ゝてあゝハぢまバゝ赤よわらゝをおらく出づよゝ

苦楝子湯

苦楝子をとりあふてせんじおくふ四をあゝばゝ

ゝとやぐ

稀豆如神散

絲瓜　升麻　芍藥　酒をゝき　山査肉　犀角

甘草　赤小豆　黒大豆

右八味等分ふし一ふくに二錢水一椀せんじて六分ふ

ゑうて渣をさらはく抜す但児の大小をはかりうす
加減してうちゆへし

甘草散

甘中あぶり粉ゝして白湯小ゝトロくさゆゝして用
ゆれば痘毒を消しうるをてかるし

稀痘保嬰丹

纏豆藤　紫草茸　牛房子いる
荆芥穂　升麻　甘草　防風　各二文　天竺黄
蟾蜍　牛黄　各一文二ト　辰砂　三文　赤小豆　菉豆　黒
大豆　各四十九粒

右十味ちゐゝ粉ゝして別に紫中三両水三椀煮交
じて半分椀ふたりて布ふてこしかすをさり砂糖

半椀いまう紀是十冪味の粉末をいま孫ゴ赤小豆乃
大よ丸し辰砂をろもてう毒疱瘡いまぐ出ざる時
り一丸濃煎の甘中湯小てうちゆ大人ハ二丸又多熱
のとき紀ゑゝバ生姜乃絞汁よすちまぜ飲すあゝく
右皮をもゝく汗を出すべし但ぢゝく飲すべゝ
預防湯

黄蓮一匁　犀角　牛房子　苦参　山豆根各一匁
密蒙花八ト　升麻一ト　紅花子十粒する
右八味ゑゝ小てせんじゑうはいまぐ出ゑゝと紀飲すれバ
ゑて悪しかゝ紀ゑのハかゝく悪さゑのハ出ずず
六味稀豆飲
山査子　牛房子　紫草各一匁　防風　荊芥

甘草 各二ト

右六味生姜三片多三椀せんじて一椀ヲ發疱のとき飲すれバ和して痘し

消瘟飲

當歸 川芎 桔梗 陳皮 枸杞 各ヲト 木通 白芍藥 各ヲト 防風 ヲト 黄連 一ヲ 姜汁小ていろ

荊芥穂 升麻 天花粉 青皮 甘草 各二ト

紅花子 二ヲ

右十五味ハ姜入水ニてせんじ二ツ程ニ成する時ハ

板ヲ服ヲし小ハ半紙ハ濡くかるさハやうに

稀豆斈驗丹

生兎皮をとぎさらし肉をとり陰ふし日ニ乾し

茵蔯蒿連尭各三匁とかるゞく水ふて煮熟し汁を
とり小児の大ふをそゝりてのゝしむ痘毒をけし
ハかゝく軽さはやゝす

三花丹

梅花　桃花　梨花

右三花とゝに細くきさみる空いきを用うざるふ空し盛り

細末にして篩ふ粉ふし
兎の脳ふて練り丸し　焙実の粉をふろもに
赤小豆黒大豆等分の せんじゆふて ゆるゝ空
もちゝ丸ゝもちゆまゝハ必すかるし

預服萬靈丹

升麻　葛根　連尭　蟬脱　殭蠶　白附

子各三匁　紫草茸十匁　山豆根匁　全蝎十箇
雄黄一匁　麝香一匁　甘草五匁
右十二味細ふ粉ふして蟾蜍一匁古酒ふて煮ため蜜
のばしくいて粉糸を孫ひと皂角子の大ふ丸し疱
瘡初熱の紀一丸些まのせんどゆふく用ゆまバ効て
かるし

容調辰砂丹
辰砂ふ面ふすり磁石一塊ひとかたくいと度ふ乃ち
黒くなるいろ磁石をとり玄度ふげり又すると粉
ふておしつく蜜ふて孫ひとふうとり乃出んとする紀
用ゆまバかふし
白牛毛散

純白牛毛 かたりみき高しの毛 焼て粉ふす 辰砂 二匁すり粉ふす 絲瓜蔕 ちりてのこりたるへたをすりあつすり粉ふす 二匁

右之味かさね合せ痘瘡出んとする早朝さゆふくもらゆあるいは蜜湯ふくめるもしくは出痘初くかるし

軽斑散 一名消瘟丹

絲瓜蔕 へちまのへたをさすり粉ふす 辰砂 すり粉ふす 三ト

右二味かさね合せ形稀あるいは蜜にてねりてなりはいはぐ出ざるとき紀彼ハ初てかるし

西来甘露飲

九月中霜降の後之るあふ絲瓜藤根よりとさ二寸ばかり所をまちとり倒よう下に皿をうけて付をとり出いぶりたれよ収先そうく人痘瘡いはぐ

ぢ　ふとき　萬根一両水ふておくせんじ為のへちま
のけをおらやぜて小児に飾しむ疱瘡むてかるし

麻油擦法

疱瘡毒ぞ小發せんとする手の中の三指より於麻
のあぶらをあつて小児乃頭額頂背おし　ぬれ手腕
あ乃足腕ゆめ　睡らしむ　おとなむてかるし

雨夜談　畢

享和三年癸亥季冬發兒

書肆

名古屋本町七丁目
永樂屋東四郎梓